

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第93号（2014年2月）

風に吹かれて（71）

白井啓治

『梅の蕾に希望はと問うと』

咲くまで待てと風のいふ』

今年になってから、と言うか昨年秋辺りから、世の中妙にムズムズと座りの悪い感じがして気分が悪い。しかもムズムズ座り心地が悪いなどと暢気にぼやいている際に、特定秘密保護法が国会で成立してしまったり、原発再稼働への道が着々と整い始めたりしている。そうかと思えば慰安婦問題や大量虐殺問題、領土等々に関する歴史認識に關係した問題などが今までに大きく浮上。まさに日本の末期ではないかと思えて仕方がない。最も居心地の悪い事と言えば、iPS細胞に次いでSTAP細胞が世界の注目を浴びると、それに追従するかの様に常識を突破する力だとか既成概念を打ち破る力を持った若い世代の飛躍を、などといった記事がしたり顔で各紙・各誌に掲載されている事である。

常識や既成を打ち破る力こそが進歩や発展を生み出すとは、今に始まった事ではなく、人間の進歩の歴史自体が常識・既成を破って紡いできたのだから、今更したり顔で言うことではない。既成を打ち破ることの重大性、創造の原則に

いては、このふるさと風にも何度書いた事だろうか。何度と言うよりは、毎号そのようなことを書き続けている様な気がする。

しかし、この創造の原則は、民主主義の原則と合わせて常に言い続けていなければならないことである。何かあった時にだけ、良い格好しいの知識人ぶって言うことではない。そんな記事は、まさにすわり心地が悪い見本のようなものである。

さて、この会報が読者の方々のもとに届く頃には、東京都知事選の結果が出ていると思うが、原発即停止を掲げてかつての日本の総理大臣二人が手を組み選挙戦を繰り広げている。しかし、エネルギー政策、原発問題は国政の考える事で地方の選挙の争点になどする問題ではない、等の話がある。だが、このお二人の所為ではないだろうか、原発を置く地元的首長選などでは積極的に争点化させてきている事は、歓迎すべきことである。原発を文明の必要悪として受け入れるか否かを都道府県や地元の首長選の俎上に載せ確りと考える事が重要である。

原発のリスクを科学的に論ずれば、必要悪で済ませられることではないのだから、皆で結論しな

ふるさと風の会会員募集中!!

会報「ふるさと風」も、お陰様で今年9月には創刊100号を迎えます。ふるさと風の会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

ければいけない。平和だとか平安と言うのは誰かに与えられるものではなく、一人ひとりが考え創造していくものなのだから。
「敗戦もまさに風流」とは小生の好きな言葉であるが、一人一人が真剣に考え出した結論であれば、風流になり得るという事であって、単純に与えられた事の結果の敗戦では風流にはならない。
花は希望とは言うが、果たして希望の花は咲くのだろうか。

進化の代償(1)

菅原茂美

生存に有利なように遺伝子変換を起こす事を「進化」というのなら、それに「代償」が付きまとうとは何事ぞ?と誰でも思うが、残念ながら進化には多数のリスクが付きまとう。

例えば、人類は700万年前、チンパンジーとの共通祖先から独立し、直立二足歩行を始め、大きく進化を遂げた。しかし、そのために、かえって、腰椎に上半身の負重がかかり、「椎間板ヘルニア」が起こり、「腰痛」などを呼び込んでしまった。こうしてみると、「進化」とは「変化」程度に受け止めた方が良さそうである。

これまでの医学は、病はどうして(HOW)起こるか:に重点を置いて検討されてきたが、近年のダーウイン医学(進化医学)は、なぜ(WHY)この病が起きたのか?:に視点を変え、新たな目で見ていこうとするものである。特に、生存に有利に働くべきはずの進化が、かえって不利益に働くことがある:という現実をしつかり観つめて、その対応を考えていこうとするものである。

(これから述べる情報は、NHKスペシャル取材班著「病の起源」という本から一部データを頂き、記載したことをお断りしておく。)

「進化」は、生存に有利に働く器官や機能が自然選択され、新たな「種」に分化して、発展していくものとは限らない。生存に不利益なものも、背負わされて新しい種に定着していく事もある。こんなことは、特に珍しい事ではなく、自然界でしばしば見られる現象である。

例えば、「オオツノシカ」は1万年ぐらい前までヨーロッパに広く分布した大型の鹿である。体長

3¹、体重500kg、雄の角は50kgもあり、その幅^{3,5}、角は巨大化し始めると静止が利かず、雌の争奪戦には有利であったかも知れないが、角が大きすぎて、木の枝に引っかかり、身動きできず、そのまま餓死したりする例もあった。同じ事は、クジャクのオスの尾羽についても言える。

さてこれと同じような事が人類についても多数見受けられる。例えば脳の巨大化に血管構造が付いていけず、「脳卒中」(「脳梗塞・脳出血・くも膜下出血」)を引き起こす。地球の引力に逆らって直立二足歩行を始めた「代償」として、膝関節痛・胃下垂・鼠径ヘルニアなど数えきれないほどのリスクを負う事となった。

しかし、よく調べてみると、直立二足歩行した事が必ずしも「腰痛」に直結するものでもないらしい。タンザニアのハッザ族は、今でも狩猟採集の生活をしており、GPS装置を付けて、彼等の1日の行動距離を調べると、平均28kmも走り廻っているが、誰一人腰痛を訴える者はいないという。一方カナダのアルバータ大学の調査によると、元陸上長距離選手24人の椎間板をMRI検査したところ、いずれも正常で腰痛を訴える者はいなかった。という事は、腰痛は直立二足歩行の宿命の結果とは云えなさそうだ。腰痛を引き起こす原因は他にあり、それは人類が1万3千年前、メソポタミアで、それまでの狩猟採集生活から、定着して農耕牧畜へと生活のスタイルを変換した。そのため前かがみで重い物を持ち上げたり、長時間に損傷をきたしたと想定されるとの事。事実、シリアのユーフラテス川に沿ったアブ・フレイラ遺跡に、当時の人骨が埋葬されており、すでに椎間

板ヘルニアは存在していた事が立証された。要するに現代人は、草取りや、前かがみで重い物を持ち上げたり、パソコンで長時間前かがみの作業をするために椎間板が変形し、腰痛のリスクを負う事になったとする見解が多いようである。人類が作り出した文明が、生活のスタイルを歪な状態に追いやり、多くの病を背負う羽目になったというのが、真相のようである。

(先日私はマッサージ師に「草取りとパソコンは腰痛の最大原因ですよ!」と言われた。休日は家庭菜園とパソコンでの物書きや「碁学研究」が、私の現在の生き甲斐だというのに、それを止めると言うなら、死んだ方がましだ!と、ゴネたくなる。しかし、ガキみたいに、ダダをこねても仕様がなない。自分の事なのだから、自分でしつかり、コントロールするほかなさそうだ!。)

①「睡眠時無呼吸症」

人は1日に2万回以上呼吸をする。睡眠中、意識がなくても自動的に呼吸を続ける。ところが日本では、中高年男性を中心に、睡眠中10秒以上呼吸停止、或いは1時間に5回以上又は一夜7時間の睡眠中に30回以上の睡眠中呼吸停止をする人が、ほぼ500万人以上いるという。このため、昼間は睡魔に襲われ、会議中コックリを繰り返し、怠慢・無気力等の誹りを受けたりする。

このような状態が進むと、「心筋梗塞」や「脳卒中」を引き起こす恐れが極めて高くなる。その理由は、体が酸欠状態になると、心臓はそれを補おうとして心拍数が上がり、ついにはその負担に耐えられなくなり、「不整脈」の原因である「心房細動」が起こる。すると血液がスムーズに流れなくなり、「血栓」を生じ、心臓の冠動脈が詰まれば、心筋梗塞、脳の血管が詰まれば脳梗塞となる。ほ

とんど正常に見える人も、脳の毛細血管がつまり微小な脳梗塞は無数に存在するという。私は医師ではないが、長年、動物の病理解剖などに関与した経験から、そういう事が「まだらぼけ」となって、普段は正常そうに見えても、物忘れ等の原因となっているのではないかと推測する。高齢者の脳のMRI画像を見ると、正常そうな人でも、脳細胞はかなり死滅・委縮しているとのこと。

では人類は進化の過程で、なぜこんな「病」をしょいこんでしまったのか？

アフリカのエチオピアで発見された人骨化石には、我々ホモサピエンスの生みの親であるホモ・エレクトスの前の原人である250万年前のアウトラルピテクス・ガルヒに、その明確な証拠が残されている。そのガルヒが埋まっていた同じ地層から、「石器」や動物の骨も発見された。このような石器や解体された動物の骨の傷痕は、それ以前の地層からは発見されていない。石器により割られた長骨から骨髓を取り出し、又、肉など柔らかいものを食べるようになる、栄養は豊かになり、大脳容積は急に増加する。ホモ・エレクトスは、確実に「火」を使っており、肉や植物を柔らかくして食べ、急速に大脳容積を増している。

人類の大脳容積の増加は、時間とともに並行して増えていったものではない。人類の歴史700万年の初期の250万年は、チンパンジーの共通祖先から枝分かれした当時と、ほとんど違わない。石器の発明と「火」を常用するようになると、急速に大脳容積は増加する。

さて、食べるものが柔らかになると、「咬筋」が少なくて済む。堅い草の根などを食べていた時代の人骨の頭頂部には「矢状稜」という下顎から延

びてきた咬筋が付着する骨の突起があった。原人の前の「猿人(450万年前のアルディピテクス・ラムダス)」の頭頂部には、しっかりと矢状稜が存在した。これが頭頂部の骨をガツツリ固め、脳容積が拡大する余地はなかった。事実700万年前、人類が直立二足歩行を初めて原人に発展するまでの、ほぼ250万年間の猿人時代に、脳容積は、チンパンジーに比べ、50ccしか増えていない。

堅いものを咬まなくて済むようになると自然と矢状稜は消え、頭頂部の骨は薄く柔らかくなり、益々脳容積は楽に膨らむことができ、急速にその容量を増していった。要するに栄養のある軟らかな食べ物が主体となると、顎の骨は小さくなり、大脳が発達すると、ますます栄養のある軟らかな食べ物を多く摂取するようになる。こうして人類は口腔容積を減らし進化をとげていった。

さて、人類は急速に「顎」の骨が小さくなり、口腔容積が小さくなくても、「言語」が発達し、歌などを歌うようになると、「舌」はますます発達して大きくなり、狭くなった口腔容積の大半を占めるようになった。すると横になっての睡眠中は、大きな舌が狭い気道を塞ぐようになり、いびきや無呼吸が起きやすくなる。人類の歯列の最後の親知らず歯は、生えない人もあり、退化傾向にある。この歯がなくなると、ますます口腔容積は縮小し、睡眠時無呼吸症が起こりやすくなる。

「青い山脈」の「山桜女史」は、「鼻」(花)より「歯」(葉)が先に出ていた。これなら、睡眠時無呼吸症は起こらない。出っ歯万歳!

要するに知能が発達し、柔らかいものを食べるようになる、口腔を囲む骨が小さくなり、顔面が縮小し、逆に舌は大きくなって、気道を塞ぎ、

睡眠中呼吸が、やりずらくなつた：というわけ。口腔骨格の縮小と大脳の膨大化は、睡眠時無呼吸症という代償を負う事となつた。

さてその「対策」であるが、近代医学では、バネのついた特殊な器具を口の中に入れて、口腔の「拡大治療」法が行われているようだ。しかしそれより有効そうな「菅原式睡眠時無呼吸症防止対策」を提案したい。*あまりものをしゃべり過ぎない。*カラオケなどで歌を歌い過ぎない。*食べ物によく噛んで、口腔骨格の縮小を防ぐ。*そして大方の「会議」というものは、「議して論ぜず、論じて決せず、決して行わず」これが世の常。ならば、会議中、誰はばかりことなく堂々と、垂直姿勢での「コックリ」を無制限堪能すべし…。

②なぜ人類に「がん」が多いか？

チンパンジーと人類のDNAの差はわずか1%そこそこ。しかし、チンパンジーのがん発生率は2%弱。これに対し人類は30%といわれる。昔は結核病が国民病と言われたが、今は正に「がん」が国民病である。二人に一人はがんにかかり、三人に一人はがんで死亡している。日本は先進国だから：ではなく、発展途上国でも、今や、がんの発生率は猛威を奮っている。

なぜ人類に、がんなど厄介な病気がこんなにも多く発生する事になったか？ これも人類の進化と大いに関係あるらしい。

そもそも「がん」はいつ頃からあったのか？

ポルトガルの研究チームがエジプトの2300年前のミイラのCT写真を分析したところ、前立腺がんが、骨盤や脊椎骨に転移したものであると推測された。またその頃、パピルスには乳がんや

カポジ肉腫に関する記述も残っているという。動物でもなんと1億5千万年前の竜脚類ディプロドクス(35^億40^万ト)にもがんの痕跡が見られるという。がんは決して新しい病気ではなさそうだ。

地球に生命が誕生して40億年。そのうち30億年は単細胞時代である(その遺骸が石油になった。生物はほぼ10億年前、単細胞のクローン増殖のみでは、環境の変化についていけず、「多細胞生物」へと進化を遂げ、生き残りを図った。その多細胞への進化こそが、がんを呼び込む起源となった。単細胞生物に、がんはあり得ない。

人体は60兆個の細胞からなり、毎日3000億個の細胞が入れ替わり、死滅・再生を繰り返して生命を維持している。

問題は再生される3000億個の細胞のうち、40個ほどの割合で遺伝子のコピーミスが起こることだ。ミスは、DNAの配列が間違っただけでコピーされることにより起こる。通常コピーミスを起こした細胞は免疫機構により排除されるが、それを潜り抜け、とめどもなく分裂を繰り返すのが「がん細胞」である。これこそ正に多細胞生物へと進化した「宿命の病」である。

更に、個体は長い年月を生き抜けば、それだけ遺伝子は、放射能や毒性の化学物質、或いは活性酸素や有害紫外線などに触れる機会が多くなるので、遺伝子は傷が付きやすい。ある年齢以上になって、生殖細胞の遺伝子に傷が付き、尚も生殖活動を続けられれば、子孫にその傷がストレートに遺伝して行く(それを防ぐため、わざわざ閉経や、インポが機能し、子孫を残せないよう、神様がしっかり仕組んでいる。それなのに「老いてますます盛ん」等の例は、神に対する冒瀆?...)。

さて遺伝子の傷とはいうが、その遺伝子変換が、

偶然にも生存に有利に働く変換であれば、めったにないことであるが「突然変異」として、種の改良に役立つ。しかし、実際は改良されることは少なく、不利益な方が多い。例えばウイルスの流行などにより、老若男女が一斉に遺伝子の一部に傷が付き、それが偶然にも生存に有利に働けば偉大な「進化」として定着する。しかし、優れた遺伝子変換がたまにあつたとしても、その個体数が少なければ、子孫が代を重ねるうちに自然消滅する。例えば平凡な一般家庭にノーベル賞クラスの秀才が一人突然生まれたとする。しかし次々平凡な嫁をとり続けられれば、わずか数代もすると、その面影は跡形もなく消えていく。有利な突然変異とか進化は、幾重にも「好事」が重複しなければ起こりえない、真に気の長い年月を要する事である。

さて本論に戻り、生物体を構成する細胞数は、分裂増殖を推進する遺伝子(アキセル)と、それを抑制するブレーキ役の両遺伝子のコントロールにより、一定の数が維持されている。その抑制が効かなくなり、他の組織にまで転移して増殖を続けるのが「がん」である。一方増殖のスピードが鈍く、他に転移もせず、生命を脅かす危険性のないのが「良性肉腫」である。

なぜ人類にこんなにも「がん」が多いのか?

それは、人類は他の動物に比べ、セックスの回数が多すぎる。回数が多いということは、精巣で、細胞分裂の回数が多いということ。がんはこの造精機能の一部を、無限に増殖する「がん」のシステムに取り入れた。

そもそも、直立2足歩行するようになると、前足2本は手となり、自由になる。即ち、物を持ち運びしやすくなる。特に雄は、体力もあり、敏捷

性もあり、もっぱら「狩り」に出るようになり、収穫があれば、群れの中のメスや子供のためにより多くの餌を持ち帰ろうとする。当然雄の能力に応じて持ち帰る量は異なる。自然と多くを持ち帰った雄は、成熟したメスの「オメガネ」にかなう。

交尾を要求すれば、オメガネにかなったオスは優先的に受け入れられるであろう。こうして狩の上手なオスほど多くの子孫を残す事になる。メスは優れた雄が他に逃げないように、いつでも「受け入れOK」の態勢に進化し、他の動物には見られない妊娠中でさえも雄を受け入れる形に進化していった。という事は、オスは他の動物の一定期間だけ交尾が許される形態と異なり、いつでも無制限に交尾が可能になった。チンパンジーと人類の遺伝子に大きな差がないにもかかわらず、精子造生に関しては、人類のメスが常時雄を受け入れる事から、オスにおいて精子を常時生産する体制が整備された。即ち生殖細胞分裂が、フル回転するように進化していった。その造精機能を、がん細胞はチャッカリ借用している。多細胞生物は常に細胞数を一定に保とうとするが、余計に増えた細胞は、アポトーシスと言い、自殺命令を受けて、死ぬように設計されている。ところが人類の精子細胞には、アポトーシス命令を拒否するシステムが存在する。チンパンジーにはそれが無い。人類のオスはメスがいつでも受け入れOKとなると、1時間に1千万個も精子を生産する異常能力を獲得した。ところが、がん細胞は、精子細胞が自殺命令拒否を活用し、無制限増殖するシステムをチャッカリ借用して、今日に至った。

そして精子を多く生産しても、それが確実に子宮に届かなければ意味がない。その役目を果たす

のが「前立腺」である。前立腺液は精子に活力を与え、精液の増量剤として射精時の快感の源でもある。その前立腺が男性ホルモンの強い支配下にあり、前立腺に起きたがん細胞は、特に男性ホルモンの刺激で激しく増殖する。一般の動物では、男性ホルモンの分泌は一定時期に活発化するが、人類は1年中いつでも男性ホルモンが大量に分泌され、もし、前立腺にがんが発生すれば、それを増大させる事となる。それゆえ直立二足歩行が、前立腺癌の遠因とも言われる。野生動物に前立腺がんは、ほとんどない。

進化の過程で、こんなにも大きなリスクを背負い込んだのなら、四足歩行でもよい。年に一度のセックスでもよい。進化をやり直したくもなる。

人類は、頭脳がいかに進化しても、戦争ばかりで、「ユートピア」は夢のまた夢。争いの絶えない低レベルの動物にしか進化できないのなら、「がん」など、そんな巨大なリスクを背負ってまで進化を遂げる必要はなかったのでは？…やり直せるものなら進化をやり直したいものだ。

受験戦争に苦しむ高3の孫がある日私に言った。『私は原始時代に生まれたかった！』

雪の常陸国分寺

木村 進

先日の日曜日、朝起きて窓をあけると外は一面の銀世界で太陽の光がキラキラ反射してきれいに輝いていました。

こちらの地方では、雪は年に数回しか降りませんが、少し積もっただけでもあたりの景色は一変

します。

石岡の地に居を構えて8回目の冬を迎えました。が、それでも今回と同じように、仕事が休みの休日に雪が降ったことが何度ありました。そんな朝には必ず徒然草の文章が頭に浮かんできます。

『雪のおもしろう降りたりし朝(あした、人のがり言ふべき事ありて、文をやるとて、雪のこと何とも言はざりし返事(かへりごと)に、「この雪いかが見ると一筆のたまはせぬほどの、ひがひがしからん人のおほせらるる事、聞きいるべきかは。かへすがへす口をしき御心なり」と言ひたりしこそ、をかしかりしか。今は亡き人なれば、かばかりの事も忘れ難し』

兼好法師がこんな朝にある人に用事があつて手紙を書いたら、返事にこんな趣のある雪の事を何も書かない無風流な人の事は聞き入れられないなどと返事が来たという。

では私も、現代風に何かに書かねばなるまい、という訳でカメラを肩からぶら下げて、家から歩いて5分程の所にある国分寺(常陸国分寺跡)に出かけました。

実は数年前にも雪の降った後にこの国分寺には訪れているのです。今回も、道路は凍りついており、滑らないように用心しながら歩いて国分寺の入口に到着しました。

入口近くの桜の木も枝も雪を被って薄化粧しており、正面の薬師堂の形の良い屋根も白く染まっています。また参道や周囲の木々も白く輝いており、何より幸いな事に、まだそこに誰の足跡も付いていません。私は、この薬師堂の凜とした姿

を確認してどこか安心して満足したのです。

雪国の人には申し訳ないのですが、数センチ程度の雪が降っただけで、その雪景色はとても趣を増してくるのです。

石岡には3つの国指定の史跡があります。常陸国分寺跡・常陸国分尼寺跡・常陸国府跡です。このうち国分寺と国分尼寺跡は国の特別史跡であり、茨城県では他には水戸の旧弘道館だけしかない。県に3つしかない特別史跡の2つがこの石岡にあります。

奈良時代の741年に聖武天皇が全国に建立を命じて建てられた国分寺も現在そのまま存続しているところはほとんどありません。何処にあったかもわからない場所も多いのです。しかし場所が特定されたこの常陸国分寺跡もどのような運命をたどったのか記録としてはあまり書かれたものはないようです。ただ何度もあった火災の記録を紐解いていくと少し見えてくるものがあります。

天慶2年(939)に将門に国府が焼かれ国分寺も焼け、また府中の大掾氏の滅亡した天正18年(1590)の5年ほど前に戦火で国分寺が焼失しました。この時に仁王門の金剛力士の首だけが焼け残ったと記録されています。その後復興したと思われませんが江戸時代になって、国分寺は今のこの場所にあった千手院という大きな寺の住職が兼務して管理するという形で、千手院に組み込まれる形で続いてきました。

また薬師堂は文政5年(1822)に焼失し、復興しますが、明治41年(1908)にはまた火災で仁王門も薬師堂も焼けてしまいました。

この時は何とか金剛力士像を持ちだそうとした

が大きくて運べず、頭部と手足をノコギリで切つてそれだけが残されたのです。この仁王門（龕龕で出来た大きな楼門でした）はこの時に焼失したままですが、薬師堂は旧八郷地区の小幡十三塚にあった薬師堂をこの場所に移築して復興しました。

十三塚の薬師は徳一法師が筑波山の周辺に配備した筑波四面薬師の一つで北面薬師でした。

そんな事を思い出しながら、この雪の国分寺を一廻りしてみました。そこには今では（大正時代に）国分寺と合併して廃寺となった千手院の墓茸の山門とその横に国分寺建立当時の七重塔の礎石が置かれています。

この千手院の山門にもいろいろな話が伝わり、また七重塔の礎石が発見されて運ばれてくる時の苦労話も伝わっています。

でもこのような話は地元の方も、意外に知られていないことが多いようです。石岡銘菓にその名を残し、駅のホームに描かれたモザイク壁画に書かれている国分寺の二つの大きな釣鐘にまつわる話も知っているようであり詳しくは知られていません。

今回また、薬師堂の前や裏手の方に置かれているいくつもの石の仏像の首には赤い布が巻かれており、一面の白い雪の中で特に目立ちました。

これは弘法大師像で明治初めの「廃仏毀釈（はいぶつしやく）」により仏像を破壊するために首を壊してしまったものを復元した傷跡を隠しているのだと、1年ほど前にある方に教えていただくまで私もまったく気がつかなかったことです。

これも石岡を含め周辺の地域に眠る歴史をここ

数年掘り起こして知ったことが多いのです。

今年もまたいろいろな地域に眠る事柄を掘り起こして歩いてみたいと思います。昔掘り起こした事柄が後からその他の事柄と結びついてくることもあり、そんな時は記録を残しておいて良かったと思えてきます。

今年初めての「雪のおもしろろろ降りたりし朝（あした）」に思いを新たにしました。

そして毎年こんな雪の朝にはこの記事を書いたことを思い出すことになるでしょう。

忍潮井（おしおい）

小林幸枝

妹が神栖市におり、以前から東国三社の一つ息栖（いきす）神社に寄ろうと思いつながら、妹との長話などで行けずにいた。（東国三社＝鹿島神宮、香取神宮、息栖神社）今度、漸く神社に寄ることが出来、参拝してきた。

参拝した時に、息栖神社の近くに日本三霊泉の一つ、「忍潮井」があると聞いてそこへも立ち寄ってきました。（三霊泉＝常陸の忍潮井、伊勢の明星井、伏見の直井）

案内板によると、忍潮井は男瓶・女瓶と呼ばれる二つの井戸があり神功皇后の三年（194）に造られたものと言われ、辺り一面海水に覆われていた頃、真水淡水の水瓶を発見し、これを噴出させて住民の生活の水としたもので、海水を押しつけて清水が噴出しているところから忍潮井の名がつけられたと伝えられています。水と人類とのかわりの中で最も古い形の井戸で、日本三霊泉の一

つと言われています。

男瓶は直径2メートル弱。白御影石で銚子の形をしており、女瓶はやや小ぶりで土器の形をしています。

この忍潮井の伝説として、「その昔（平城天皇の御宇大同2年（809））数キロ下流の日川地区より息栖神社がこの地に移された際に取り残されてしまった男女二つの瓶は、神のあとを慕って三日三晩泣き続けた。とうとう自力で川を遡り一の鳥居の下にピタリ据え付いたという。この地に定着して後にも時々日川を恋しがり、二つの瓶は泣いたといわれている。日川地区には瓶の鳴き声をそのままの「ボウボウ川」と瓶との別れを惜しんで「瓶立ち川」と名付けたという」この「瓶立ち川」の地名は今も残されています。

また二つの瓶には、男性が「女瓶」の水を、女性「男瓶」の水を飲むと二人は結ばれるという言い伝えもあるそうです。

このふる里という周辺には、興味深い色々な歴史や伝説が残されています。大切な文化として伝え残していきたいですね。

富田町のやいひ

兼平智恵子

恒例の常陸國總社宮例大祭は旧石岡市街地を中心に石岡市民の誇りと心のよりどころとして九月の敬老の日を入れての三日間、絢爛豪華な絵巻が繰り広げられます。様々な出し物の中で華やかさを誇る山車の上に乗る人形について、一昨年からご紹介してきました。

これに続きまして、更にお祭りに関しての知識を深めたいと今回は古い歴史をもつ富田町のささらスポットを当ててみました。

おまつりの第一日目は神幸祭のお仮屋に向かう渡御と第三日目の本殿への還御の際、の露払いの大役を務めます。さらには全町の唯一の出し物で古くは江戸時代後期に府中(旧石岡市街)の愛宕祭や天王祭を賑わせ、種々の古文書にも記載されており、さらの乗る屋台前の角、二箇所にある擬宝珠に「嘉永二歳 酉 六月日 富田町」と刻印され、古くから大切に保存されていたことが窺えます。

格式高く「七度半の迎えを受けて出る」と言われています。

紺地に八咫鳥を染め抜いた幕が張られた、移動式の屋台上で棒を操る三匹の獅子舞が演じられます。三匹はそれぞれ老獅子、若獅子、女獅子で全体が黒漆で塗られ、目と歯には金箔を施し咽頭部には軍鶏の羽で覆われています。獅子連は笛と太鼓で構成され「通り」「一匹踊り」「念佛」「三匹踊り」といった演目があります。「通り」は道を流して歩く時の踊りで三匹の獅子が三百六十度すばやく回転しながら舞う。「一匹踊り」は各獅子の個性を表現しながら舞う。一番元氣よく踊るのが若獅子である。「三匹踊り」は突然三匹が一緒に踊るもので雄獅子と女獅子の性愛が演じられる。

「富田町のささら」は昭和五十六年に石岡市より有形民俗文化財に指定され、更に平成八年一月には県の文化財保護委員会の方のお話して「この様なものは各地でむしろ衰退の傾向にあるが、富田町の場合は保存会の構成が、老人から非常に若い世代の人々と幅広く、舞い、笛、太鼓、等の表現

が良く伝承されて居てすばらしい」とのことです。茨城県指定無形民俗文化財に指定されたそうです。

「歴史の里いしおか」と県の認定を受けている石岡としても名誉な事であり大いに、市民の皆さんにも知ってもらい、石岡市の誇りとして大切に保存、伝承されていく事を心から願いました。願わくば、おまつり以外に見学出来ずれば「歴史の里いしおか」の知名度アップに繋がる事でしょう。

ご愛読頂いてる皆さん、どうぞ今年のおまつりには是非、屋台に乗る黒塗りの獅子が笛と太鼓で、特に笛を主とした涼やかな音律で舞う、愛くるしい仕草のささらをご覧下さい。今年はささらの富田町がおまつりの年番町になっています。

今回の「富田町のささら」につきましては高山様には色々とお話を頂き、また、文化財指定記念誌「石岡 富田のささら」を誠に有り難うございました。

「石岡 富田のささら」富田町ササラ保存会より一部抜粋しました。

「ササラの呼名」

呼名は、文献によると別名、三匹獅子。三つ頭獅子。単に獅子と呼ぶところもあり、さらに、「ササラ」または「カッコ」と呼ぶところもある。石岡でも、ササラと呼んでいるが、これは、ササラ音を出す伴奏用の楽器の名で、これには二どおりある。

その(一)は竹の先を細かく割ったもの、いわゆるササラ竹、漢字で書くと「觶」がこれである。

これで敵(ゴ)という楽器をならした。敵は中国の楽器で木で作られ、長さ三五センチ位で其の形

は虎に似て、背に二七のギザギザがあり、このギザギザをササラでなぞって音を発する。中国では音楽の終わりに鳴らすことになっている。

その(二)、長さ一五センチくらいの板片を一〇八枚、これをなめし皮の紐にとおすと、大体一メートルぐらいになり、紐の両端を両手で持って彎曲にしながら打ち振ってさらさら音を出させる。漢字で編木(ササラ)と書くのがこれである。

千葉県では、三匹獅子を一般に「カッコ」と呼んでいる。カッコとは獅子を踊る人が腹に抱いている小太鼓の羯鼓(カッコ)に基づいている。ササラにしてもカッコにしても、この獅子舞に付属している楽器をもって呼名としたと思われる。

「烏丸家から」

富田に伝わる話ではササラは京都の公卿である烏丸家から来たものであると言われている。其の理由は、(一)幕に烏の紋所があること。(二)振り歌に「からす」という言葉が出て来ることである。また言い伝えによると富田のササラの頭上、髪のに一六の菊のご紋章の金具がついていたと言う。

「農耕儀礼」

ササラは大地に潜む、すべての悪魔を追い払い平和にする能力があるばかりでなく火を防ぎ、地を固め、家を固める力もあるとされている。

「保管のしかた」

ササラの獅子頭は舞う日が来ても長持ちや箱から出してやらないと、中で踊ったり喧嘩したりして騒ぎあばれると伝えられる。富田のササラを保管すると保管した家に病人が絶えないと言われ預かる家がないので、現在は北向観音堂に保管してある。病人が絶えないのは、舞う日が来ても出し

てやらないためであろう。

(参考資料 いしおか昭和の肖像)

・寒くても大きい顔して葉牡丹 智恵子

滝前川から渡場川(御蔵下川)

伊東弓子

今回は、川守の地元である下玉里の平山、大井戸地区の人々に関心をもってもらう為、散らしを持って歩いた。区長さん常会長さんには理解を求めながら、戸別に配る了承を頂くことにした。市の文化祭が済んだ十一月二十一日(木)霞ヶ浦平山湖畔を歩こう(1)を実行した。平山、大井戸地区の人、友人の機織仲間、毎回参加してくれる人、二十三〜四人の参加者だった。

古民家の広場で学芸員から概要を聞いての出発だったが、「玉里御留川」の本を用意しなかったことは非常に残念だった。話しがより具体的になるには必要な物だった。館山館(玉里八館の一つ)の南一角から、玉里で一番大きいといわれている権現山古墳(玉里八館の一つ)を左に見て天の宮の方へ下った。古墳高台にどっしりと築かれた姿は当時の有力者の姿其の物が偲ばれる存在だ。

高崎から下玉里に入ると「滝」という地区がある。その周辺には滝前川、滝の坂、滝台、滝台古墳、下滝畑、下滝川、天狗党滝平主殿佳幹の子孫宅、切り絵の滝平二郎の実家等がある、と説明し歩いていると滝平主殿佳幹の子孫の当主が堤防で待っていてくださった。参加者の中に入って昔の話や現在の事を話しながら一緒に歩いてくださった。

滝前川。玉里御留川の一つ(絵図で八番)。この辺かと思われる所の左に急な坂があり、その先は女池、御川守宅へと続く。右の高浜入の海の奥に筑波の山の峰が見える。この辺りで育った滝平二郎はこの雄大な自然の中で歴史を物語る環境に触れそこで働く人々の生き方を感じながら、才能が磨かれ、数々の作品が産まれていったのだろう。堤防の突端少し手前に舟溜りがあり、下滝揚水機場がある。

この辺りが、下滝川。玉里御留川の一つ(絵図で九番)であろうか。市内バスの停留所に「下滝」と書かれていたり、若い人達の住む一角に「下滝団地」と名付けられたのも何か嬉しい思いで通り過ぎた。向う岸の八木が本場に近い。手が届きそうというのも大袈裟だがすぐ近くだ。震災で壊れた八木の堤防も直つたらしい。青シートも外されている。鯉の養殖の面影を残す足場と小屋が水面に影を落としている。ゲートポールをして楽しんで来た広場には、木の葉が集まっていた。この近くの水神様には良い話がある。コンクリートで固められた大木がとても心配だったので、都会で仕事をしていたこの地域の同級生が定年で帰ってきていたので話してみた。すぐ直したというので驚いた。木はいきいきし、水神様も新しい台に安置されていた。本当によかった。これこそ地域の力だと改めて思ったのは十年も前のことだった。日清、日露戦争の頃、霞ヶ浦の魚の加工が盛んになり、戦地にも送られたそうだ。銚子、潮来の方から移り住んだ人もいたと聞く。盛んだった頃の賑わい、財を成した人もいたとの話が残るだけで今は一軒の問屋が頑張っている。

渡場川(御蔵下川)。玉里御留川の一つ(絵図で十番)。

ここははっきりしている。対岸の八木、宍倉へと渡舟が行き来していた所。役人や回状も運ばれていたろう。罪人も向う場他領へと放免した通りだった。稗や年貢米の運搬に舟の出入りもあつた。そんなすぐ近くで渡場川で漁が行われたのだから賑やかだったろう。魚は水の中で驚いていたろうに……と想像していた。今は舟の出入りした所も漁場も蓮田と枯草が覆っている。大井戸から堤防沿いに植えられた桜の苗木が確りと根づいている。いつの日か花見をしたり、御留川マラソン大会が出来るよう願っている。大部時間が懸って疲れたという声が多く予定コースを一部次回に回すことにした。

左に曲がると平山集落センターが目に入る。集う人もなく朽ちるのを待つかの状態だ。足を進めると正面に数体の縄とき地蔵が並んでいた。唐丸籠から降りた罪人への思いを込めて地元の人を作ったのだろうか。家族が作った物だろうか。その上に枝を伸ばし地蔵に風があたらないように、雨で濡れないように大きくなったえこの木、いろいろの出来事を知っているのだろうか。何も言わない。その大木に絡んで藤の木がある。毎年葉をつけ、花を咲かせ冬には裸になって何年経ったのだろう。毎年妹と母を連れて花を見にきた思い出の所だ。稗倉の跡も畑になり地域の倉庫が建ち、個人の家が並んでいる。いつの頃か高崎の人が稗倉の木材を貰って隠居を建てた話しを聞いたことがある。

お手洗いのことは考えもしなかったが、今回参加した一人が「家の使ってください」と言ってくださった好意に甘えて、四〜五人が立ち寄りしてもらった。ありがたいことだった。今度は心くばりするよう予定に入れていこう。

坂を下って行く附近は、若い頃、鬱蒼としていた。友から「ここはね、玉里のチベットだといわれているよ」と聞かされた。五十年も過ぎれば様変わりもする。馬捨て場があったが、いつのまにか姥捨場という話になっていた。山田峰古墳の腹にあった一族の墓地も上り口の方に並んでいる。坂を上りきった左側には新しい家も三々四軒建った。道も幅広く舗装され、あちこち削って直線にちかい道路が出来たのだから、良さの反面犠牲もある。小さな古墳が幾つか姿を消したり削られたそうだ。

ゆうゆう農園がある。ご主人が畑をおこしブルーベリーを拵えている。奥さんが実でジャムを作りをしている。春には道路際には地域父親と息子さんの植えた桜が咲き、ご夫婦が育てた雪柳、連ぎよ、花大根、菜の花が競って花を開く。左の山の斜面には見晴し台があり、御留川の大半が目に入る。季節を問わずお出かけくださいとさそってくれているようだが、そこで楽しんでらお持ち帰りには塵だけですよと心にとめてください。近くにあった牛舎の二棟もなくなった。

桃山古墳（玉里八艘の一つ）が左側にある。篠笹が繁って上がるのが出来ない。この付近に「萩原農園」があった話を聞いたが、詳しい事がわからないのが残念だ。いつの頃のことか東京から着た人が別荘として使っていた。お金持らしい人だった。霞ヶ浦で舟遊びをしていたとか、山をきれいにして桃を作ったそうとか、それ以上調べもないでいてはますます分からなくなる。この山の掃除や農園のことを知りたいという人の話があった。何とか智慧を絞ってみたい。坂を下ると玉川農協の名前と共に姿を消した玉川農協惣菜工

場が右奥に坂下、左に玉川農協ミルプラント工場も畑と化していた。

又坂を上ると滝平古墳（玉里八艘の一つ）が左にある。滝平二郎の実家の当主が手入れしていることで歩きやすかった。蜜柑を育てていた時期もあったという。当主は定年後故郷に戻った日から山掃除を始めたそう。故郷を良くしたい思いで声をかけ合っているという。こう一人一人の思いが力となって、活動する仲間の増えるのを願っている。あの人もそうだと、先日熱っぽく話してくれた区長さんのことを思い出した。市の教育関係者にここへ来てもらって、ここから景色を眺めてもらい感動した思いを、子供達に体験させて欲しいと伝えた。第二、第三の滝平二郎を育てる場、写生会はどうかと提案したそう。

「トイレがないとだめだ」という返事が返ってきたので「その辺ですませてもいいよ」と返すと、今の子はそれではだめだという。怖がったり、汚なったり便所があっても大変なんだそう。全くだうなってしまうのだろうかというところで話が終わったが、校外に出ることは大変なそう。その後ある人曰く「じゃトイレを借りて持つて行くように考えてほしいもんだ」と前向きの話だった。

滝平さんは「ごころうさま」と言って山道を降りて行かれた。私達より年上のようなですが皆の先頭に立って歩き、必要に応じて話をしてくださった。その後姿を見送りながら思った。滝平主殿佳幹の碑を見せて頂いたり、お話を聞かせていただくのも礼の一つだったと、貴重な方との機会を逃したことの残念さを次には生かそうと決めた。今回は各地区に置いた散らしが大分減っていたの

で気をよくしている。集合場所での幟り使用も考えていこう。

「御留川を歩く会」は寒い間は皆、苦手になりがちだが、実際に漁は晩秋から冬そして春先迄続く。私等も一二月頑張つて勉強も良いと思つたが又仕事を増やすと言われそう。そこにより知らせが届いた。霞ヶ浦生態系研究所研究会の方から、「霞ヶ浦四十八津成立の謎を解く」という演題で講演会の通知だった。「御留川」以前の霞ヶ浦の姿が分かるかもしれない。行ってみよう。

【特別企画】

私本『平家物語』

打田昇三

「ふるさと風」の会・主宰の白井啓治さんに言われて一作品千枚の原稿に挑戦し「虚構と真実の谷間」を何とか書き上げた。猛暑の中でまとめた最後の百枚が合格して目標達成を実感したのだが万歳三唱をして満足するだけでも能が無い。苦勞をして借金を返し終わったようなもので何となく気の抜けたビールのような生活に戻ってしまったけれども「小人閑居して不善を為す」という諺もあるから、何か次の課題を持っていないと高齢者特有の茫然自失症候群が進む様な気がして原稿も目標を立てて書くことにした。何を書くか：単純な発想だがテレビで「平家物語」を放映していたから、此の原文を自分なりに勝手に現代語で書いてみようという僭越で不遜な決意を固めた。何処まで続くか分からないが、平清盛に苦情を言

われないように注意して書く心算である。

平家物語は中世を代表する戦記文学と言われている。桓武平氏の興亡を余す所なく描いた作品として和漢混淆体と呼ばれる文章で綴られており物語としても完成度が高く評価されている。本来は琵琶法師による語り（平曲）を主眼として作られたため仏教用語や難解な表現があるようなので、それをどう現代の表現に置き換えて行くかがポイントのようであり、書く為の勉強は欠かせない。

小説を書く訳ではないので、出来るだけ「原文に忠実に」を心掛けるけれども、平清盛が活躍したのは凡そ八五十年前、平家物語に最初に登場する平忠盛の時代が九百年ほど前で、桓武平氏が常陸国に來たのはさらに古く千百年以上も昔のことになるから（西暦二〇二二年現在で、社会環境などが現代とは大きく違うことになる。悪く言えば現代とは全くかけ離れた無駄で権威主義の愚行のよつたから、その説明やら関連事項を分ける限り書きたいので、原文から離れることもあることをご承知おき頂きたい。本文に入る前が長くなるけれども、必要なことは始めに述べておき、更に本文中でも内容に応じて、その都度、説明又は注釈や個人的な愚痴などを付記することとした。

平家物語の原本としては、大正の初期に国文叢書として博文館から出されたものと、ごく近年に出た岩波の文庫本を併せて使わせて貰う。参考書は通俗日本全史（大正初期、早稲田大学出版）の源平盛衰記、昭和初期の物語日本史（雄山閣）、国文学誌の平家物語必携など、関連の有りそうな著書は手辺り次第に図々しくお手本にする。

平家及び平家物語が世に出るまで

平家物語は、平清盛もそうだが、彼が憎みても余りある源頼朝の死後、西暦一二〇〇年代の初めに藤原行長（信濃の前司＝長野県知事を務めた人物）と琵琶法師の生仏という者が琵琶を伴奏とした「語り」の脚本として書いた、と言われており、それが他の人々に依って何度も改訂されて、或いは琵琶用のものとなり、現存する読み物としての物語になり、それぞれが伝わるようである。

平家物語と言えば、有名な書き出しの「祇園精舎の鐘の声：」で知られるように仏教に基づく無常観と盛者必衰の歴史観で綴られた物語ではあるが社会的には「神仏依存の古代」から「人間の時代である中世」へと転換する頃を荒々しく生きた武士団が活躍する物語である。琵琶法師用の文章が基なので仏教がらみで読み難い点もあり多分、それを補う目的で書かれたのが「源平盛衰記」なのであるうけれども、此方の方は平氏よりも源氏に力点が置かれているようなので平家盛衰の話はやはり平家物語ということになり、多くの人々に知られているのであろう。有力な説として平清盛は「白河法皇の御落胤」と言われているようだが、それは有りそうなことだと思し、一族でも無いから血筋に拘る必要もなく、従来の歴史に従うと平家の誕生は次のようなことになるのである。

諸国に国分寺・国分尼寺が建てられてから三十年近く経って先ず称徳天皇の死により此の女帝が後継者に考えていた弓削の道鏡は追放された。弓削の道鏡が天智天皇の孫（光仁天皇の異母弟で桓武天皇の伯父）であるとすると説はかなり古くからあったようで、明治・大正時代にも複数の学説が

発表されているらしい。称徳天皇の死と弓削の道鏡の追放とによって次の皇位が空白になった。道鏡を否定された称徳天皇が、憤慨して後継者を指名せずに死んでしまったからである。

日本の歴史は怪しい神話から始まっていたけれども実在性が高いと見做されているのは天皇としてでは無く王朝として崇神、応神、継体の存在が想定されており、それと並行するか、対立したか、或いは後を継いだかは不肖にして知らないが出雲王朝、九州王朝そして蘇我王朝が在った。それらの王朝は多かれ少なかれ朝鮮半島の影響を受けていた。その証拠に百済国などは古くから交流があり、西暦五五二年には仏教が百済の国から伝えられており、西暦六六三年には大日本帝国の軍隊が百済国と組んで朝鮮半島に勇ましく出撃して行って唐と新羅の連合軍に見事に負けている。

そうした出来事を経て、と言うより敗戦の混乱に乗じて勢力を広げたのが大和王朝であり「大化の改新」以後に天皇制を確立したのが天智天皇と天武天皇からなのであろう。しかし此の時代でも、天武天皇との皇位継承争いに負けて歴史上から消されてしまった弘文天皇が居るから、正確な歴史と言うのは容易に伝わらないし、皇位を継ぐということは大変なことなのである。称徳天皇の場合も弓削の道鏡青年の他に後継者となるべき人材はいたと思し、天智天皇も天武天皇も、国政の面ではどうか知らないが子孫だけは多く残した。候補者はそれなりに居たと思うのだが、皇位の継承は宝くじと違って当りは一本のみで二等以下が無い。対立する敵が多いから目立って誰かに消されるし、そうかと言って隠れた俣では埋もれてしまつて売り込みが出来ない。例えば悪いが映画の

通行人役のようにタイムリングが難しいのである。

称徳天皇の後に第四十九代の光仁天皇として藤原一族に見出された白壁王も、天智天皇晩年の子である施基皇子の子であったから皇位継承候補者の一人に挙げられていた。つまり危険な領域に居たのである。その為には苦心惨憺、認知症の真似ぐらいでは見破られるから、飲めない酒を飲んでアール中を演じたり、各地に潜伏したり、死んだ振りをしたり、偶には顔を覗かせて存在価値を示したりして何とか生き延びた。その頃の政界は石岡に居た藤原宇合の息子たちが活躍していて、隠れ方が上手と言うか演技力が有ると言うか、放射能漏れの緊急事態を上空から悠々と視察した総理大臣のように、自己PRが巧みで危機管理能力に優れている？ように見える―(悪く言えば逃げ上手)という理由で白壁王を選んで皇位に就けたのである。是に依り天武天皇系だった皇統が、大化の改新で蘇我氏から王位を手に入れた天智天皇系に戻り本来の萬世一系に帰ったことになる。好運か不運かは分からない「運」が巡って来るのが遅かったから白壁王の即位は、世間で未だ若いとお世辞に言える限界の六十一歳であった。

桓武天皇は光仁天皇の子である。名を山部親王と言った。天平九年(七三七)生まれとされる。光仁天皇には既に井上皇后との間に生まれた他戸(おきと)親王が居り皇太子に立てられていた。母の皇后は聖武天皇皇女であるから血統から言えば申し分のない皇太子である。山部親王の出る幕は無くして後に桓武平氏などは出現しない歴史の予定であった。ところが奇怪なことに、或る日突然に井上皇后と他戸皇太子が反逆罪を犯したとして検挙される事件が起こったのである。これは全くの

冤罪であり、誰かの陰謀だと誰にもわかったのだが、与野党議員とも何も言えなかった。

裁判員制度が未だ無かったから、藤原一族を中心とする何人かの怪しい裁判官が、起訴状もろくに読まずに、いきなり「有罪！」を宣告して皇后と皇太子が居なくなつた。これは聖武天皇の孫に当たる他戸親王の即位では折角、天智系に帰つた皇統が天武系に戻る。それを藤原一族が嫌つた仕業であるうけれども証拠はない。皇太子が居なくなつて代わりの候補者を選定する会議が開かれ、それぞれの高官が自分の推す人物を売り込んだ。

その席で藤原良継、百川の兄弟が強力に推選した人物が山部親王である。会議では親王の母親が「高野新笠」という百済系帰化人であつたために天皇としての血筋が問題視されたが「競馬の馬ではないから血統より人物本位」という藤原兄弟の尤もな主張が通つた―強引に通じた。藤原氏の思惑もあるけれども、親の七光りを看板にする現代の政治家にはぜひ聞かせたい話である。

父帝の即位が定年後であるから山部親王も四十代の皇太子は致し方なく即位は四十五歳である。此の人は、桓武天皇となる前の経歴として皇太子の他に東京大学(当時は京都大学か?)の学長、天皇の侍従、宮内庁長官を勤めた。光仁天皇が病気になるので即位は予定よりも少し早まつた。皇后は功臣・藤原良継の娘・乙牟漏(おとむろ)、第二皇后として藤原百川の娘・旅子(たびこ)が立てられた。良継も百川も藤原宇合の息子である。余計なことだが藤原旅子さんは鞍馬から比叡山に向かう洛北山中に旅の安全を護る神様「還来(もどろき)神社」の祭神として祀られている。

一般に知られている桓武平氏の系統は葛原(かず

らはら)親王から始まる。桓武天皇の第三皇子(又は第五皇子)で、母親は夫人(ふにん=皇后以外)の多治比真宗(たじひまむね)である。多治比氏も古来の名族であり真宗の父親である多治比長野は参議(中納言)の下に在つた。

葛原親王には二人の男子が居た。高棟王と高見王である。このうち、兄である高棟王は比較的古い時期に臣籍に下り平高棟(たいらのたかむね)として公家社会に入ることができたから「堂上平氏」と呼ばれていた。この一族は紫式部時代に当時の一条天皇皇后である藤原定子の苦境(藤原道長の苛めに遭つていた)を救い、屋敷を皇后に提供したりしている。後に平清盛夫人となる時子がこの系統である。

弟の高見王は早世したのだと思われる。其の為に残された子供たちは末流皇族として悪く言えば長い間、放つて置かれた。天皇が頻繁に変わるから該当者も増えて、皇族から離すと言つても餞別ぐらいいは出さなければならぬけれども予算が無から出来ぬ。葛原親王は文徳天皇の仁寿三年(八五三)に亡くなつているが、その以前に何度も孫たち(高見王の子)を臣籍に下すよう朝廷に申請していたが聞いては貰えなかった。

葛原親王の異母兄である淳和天皇時代の天長三年(八二二)に政府は常陸、上総、上野の三か国を親王任国とした。皇族にかかる経費が増大したため、豊かな三か国の収入を皇族専用予算に充当したのである。国守には親王が任命され現地には行かず給料だけ貰う。国衙(こくが=県庁)には副知事に当たる「介(すけ)」が国守格で来るのだが、例えば「更級日記」を書いた女性の父親・菅原孝標のように真面目に現地へ来て国内の主要な神社に

参拝をするようなことが廃れてくる。特に藤原政権が依怙臆頂(えこひいき)で任命するような常陸介は、給料だけ口座に振り込んで貰って都で上司のご機嫌取りに専念する。現代の振り込め詐欺に似たような制度になってしまふ。そうなる国府では判官職の大掾が国守代理で威張ることになる。中央政府も国守の親王に遠慮して余り干渉は出来ないから国(愚)自体が乱れる。

それはともかく、高見王の子らは皇統から離れ過ぎた皇族であったから、この恩恵には全く浴さなかつたが、やがて何十年も経って九代後の宇多天皇のお蔭で常陸国に就職が出来たから良かったというべきであろう。宇多天皇は、一度は源氏として皇籍を離れたのだが藤原氏の都合で皇族に復帰させられた人である。母親が桓武天皇の孫になる女性であり、祖父の仲野親王が葛原親王と親しかったから何とかしてくれたのであろう。

寛平元年(八八九)五月十三日、高望王は皇族の籍から離脱することができた。平高望として上総介(事実上の千葉南部国司)兼ねて常陸大掾に任じられ五位下に叙されたのである。念願の就職が決まって喜んだ。祖父の葛原親王は何度か常陸国守に任じられていたから常に懐(なつ)ところが暖かかった。都を離れるのは辛いが豊かな国の管理職は仕事として悪くない。関東に土着する覚悟で千葉県南部及び茨城県にやってきた。

平国香は平高望の長男である。父親に従って関東に来たのは高校生ぐらいと推定できる。父親の死後も筑波山麓に住み、コネで常陸大掾の職に就いた。大掾職だと官位が正七位下(近衛の下士官程度)しか貰えないが、鎮守府の長官にも任じられたから従五位下に叙された。既に常陸国には大掾職の

前任者である源護が土着していたから、国香は是に接近し縁組を結んで地盤を広げた。源護も皇族の端々(はたはた)しかなかったが、血筋が明らかではなく嵯峨源氏の末流と推定されている。桓武天皇の第二皇子である嵯峨天皇は名前が分からないほど大勢の子孫を残したらしい。「親王任国」が出来たのも、その影響であろう。平国香は源護との関わりで甥の将門を敵に回したのである。源護の息子たちが、平将門に卑怯な待ち伏せを仕掛けた戦に敗れ国香の許に逃げ込んで来たから、将門は黒幕と見做して攻めた。国香は勝てないと思って自殺したので平将門に殺された訳ではない。

どうでも良いことだが、石岡に平国香の墓が在るとするのは根拠の無い話で常陸国の辞書とも言える「新編常陸国誌」にも記録がない。大掾職(国府の判官職)の局長(総)であった平国香は筑波山麓に在った館から時々国府に来ていたのであろう。鎮守府將軍などを命じられており東北地方勤務も長かつたし前任者が居たから、一族の長だっただけで俗説のように石岡地方で権力を振るうことなど出来る筈がない。国府の判官職は監察職務が主であり非常事態でも無ければ役所に居ないほうが喜ばれたかも知れない。その当時、常陸国府には都から来た常陸介が事実上の国司として近くに官舎住まいをしていたから平国香が居なくても行政的には何の支障も無かつたと思われる。平貞盛は、父親が自殺した時期には都に居た。

馬を扱う官庁(左馬寮)にさまりよ(こ)で三十人ほど居た左馬允(さまのじよこ)に任じられていたとされる。国土交通省の係長級公務員であろう。承平五年(西暦九三五年)一月に「チチシス。イソギカエレ」という電報を受けて常陸国に戻り、最初は事情を聴

いて「それは親父のほうが悪い！」として平将門と戦う気はなかつたらしい。葬式が済んだならば帰京して公務員生活に戻ろうとしたのだが、うるさい親戚のジジイらが居て許さず、結局は合戦に巻き込まれた。将門との戦いに敗れて各地に潜伏し、叔父が事実上の国司(常陸介)であった常陸国府に匿われていた。天慶二年(九三九)には、それを知って押し寄せてきた将門軍と双方がそれぞれ保護する人物引き渡し交渉をしたのだが決裂したため、国府庁舎は将門軍に攻められたのである。貞盛は逃れて各地に潜伏し、やがて下野国の藤原秀郷と組んで将門が兵を解散した時期に攻め込んだ。

天慶三年(九四〇)二月、将門が戦死して承平・天慶の乱が収まり、筑波山周辺にあった平氏の領地(将門討討で得た領地を含めて)は貞盛の手に帰した。貞盛は都に帰ってから武人として認められ諸国国司などを務め、定年後は都に住んで従四位下(衛門府や兵衛府の長に相当する官位)に昇り武勇の人として知られた。

常陸国内にあった平氏の領地は、貞盛の弟(繁盛)の子で、貞盛が養子とした維幹が相続した。維幹と其の子孫は常陸国府の大掾職を世襲して大掾氏となり筑波山麓の多気城に居たが、鎌倉時代に北条氏と八田氏(小田氏の祖)らの陰謀で全領地を失い大掾氏(常陸平氏)は滅亡した。平家を滅ぼした源頼朝は、桓武平氏の本流である大掾氏が日本一の大地主であることを許せなかつたのであろう。その際に多分、陰謀に協力したと推定される大掾支流の吉田系馬場資幹が大掾本流の領地相続を許され水戸から石岡に進出して来た。これが戦国時代に滅びた大掾氏である。

平貞盛は、甥など多くの若者を養子としたが、実の息子は四人居て、末子の惟衡（これひら）が下野守（栃木県知事）などを歴任した。この人物は最も勇猛であり「四天王」と称されて武門の誉れが高かった。四天王とは平惟衡、平致頼（むねより）平国香の末弟・良茂の孫、源頼信（八幡太郎義家の祖父）それに藤原保昌（国司などを務めた公家で、不敵な盗賊の袴垂保輔を恐れさせた）の四人である。貞盛の跡を継いだ惟衡は藤原道長に睨まれながら伊勢国に進出を始めた。「伊勢平氏の祖」と言えるのが惟衡である。惟衡と致頼とは伊勢国の開発を巡る対立から争いを起こし、双方ともに流罪に処されている。

惟衡の後が正度―正衡―正盛と続き、清盛の父親である忠盛に続くのだが、平家物語の冒頭には「：国香より正盛に至るまで六代は諸国の受領（ずりょう）国司など地方官たりしかども、殿上の仙籍をばいまだ許されず」と書かれているだけである。この三人の時代は関東で起こった平忠常の乱を源頼信が平定し、或いは前九年の役などで源氏が目立っていたのであろうか。日本外史には「正盛武幹あり。時に平氏、源氏と並に武臣たり：」として、平家物語の冒頭に挙げられた源義親の反乱を平正盛が討討したと記録されている。

藤原政権は、皇族から臣籍に下った源氏と平家を適当に操って汚れ仕事をさせていたのである。

平家物語の主役である平清盛が、父・忠盛の実子では無いと言うのはかなり有力な定説となっている。白河法皇が愛人の祇園女御の妹に産ませたとする説が一般的であり、NHKのドラマでも其の筋書きになっていた。清盛の子供たちは大勢居て日本外史の「平氏系図」には長男・重盛以下、次のように記載されている。…重盛、基盛、宗盛、

知盛、重衡、知度、清房、維俊、清貞、清邦、良衡：以上が男子である。女子は八人（九人説もある）で、安徳天皇を生んだ建禮門院徳子は次女になる。大部分が公卿に嫁ぎ、平家滅亡後も公卿社会に平氏の血を伝えたと言われる。細部は不明だが、この系統は皇室にも関わりが有るらしい。

男子のうち、重盛と基盛は清盛の最初の妻（高階氏）を母としている。高階氏は学者の家系であり歌人・在原業平の血筋にもなるのだが分流が多かったようである。平家滅亡の際に、安徳天皇を抱いて壇ノ浦に沈んだ徳子は二度目の妻である。先に述べた高棟流の平氏から嫁いだので「桓武平氏」の正系であり平氏への思い入れが強かった。

藤原一族がのさばる社会で、卑しめられていた武家から頂点に上りつめた平清盛であるが、嫡男の平重盛は源頼朝が伊豆で兵を挙げる前年に他界しており、弟の基盛はさらに早い時期に若くして亡くなっている。源頼朝は重盛に恩義を感じていたから、もし重盛が生きていれば源平の歴史も少し変っていたかも知れない。この人の墓所は常陸国内に置かれている。大掾本流の義幹が場所を提供したのである。結局、時子を母とする平宗盛が平家の頭領となったのだが、この総大将は何となく頼り無くて壇ノ浦で源氏の捕虜となり結局は斬られてしまった。是について宗盛が実は清盛の子では無かったとする説もあるが、本当かどうかは分からない。高望流と高棟流と両桓武平氏の血を継ぐ男児が欲しい清盛が徳子に「男児を産め！」と厳命したのだが、生まれたのは女兒だったため同じ頃に生まれた職人の子と交換した：と、壇ノ浦に飛び込む前に時子さんが言ったとか、言わなかったとか：それを聞いた女官も海に飛び込んで

この秘密は闇に葬られるはずだったが、女官が救助されて秘密が漏れたのである。

宗盛の弟の知盛や、清盛の甥の教経は立派な武将だったようで平家物語の巻十一には、それぞれの壮烈な最後が描かれている。清盛の弟は家盛、経盛、教盛、頼盛、忠度で他に妹が二人、これも公卿に嫁いでいる。家盛と頼盛の母が池禅尼であり早逝した家盛に似ていると言うので平治の乱に敗れて捕らわれた源頼朝少年を死罪から救って日本史の歴史を変えた。この女性の祖先は、紫式部時代に兄の内大臣・藤原伊周（これちか）の恋愛事件の矢を放った豪傑の藤原隆家である。処罰を受けてから許されて九州赴任中に海賊を撃退している。「枕草子」で知られた清少納言が仕えた定子皇后（一条天皇皇后）の実弟になる。

平氏の興亡がテーマである平家物語は「巻一」から「巻十二」までと「灌頂巻」から成る。原本に依っては巻一の前に「剣（つるぎ）の巻」が付いているが、内容は源氏の礼讃記事のようなので後年に誰かが余計なサービスをしたのだと思う。本来の趣旨に合わないなので、「剣」は外して「巻一」からの本文に入らせていただく。

（次号より巻一「祇園精舎のこと」にはじまる平家物語本文の打田昇三訳を掲載してまいります）

※打田兄より届けられた原稿には、そのタイトルを「勝手に書く平家物語」となっていた。しかし、勝手に書くではあまりにも可愛そうなタイトルなので編集者の勝手に「私本平家物語」と変更させていただきました。

【風の談話室】

何十年ぶりかの記録的な寒波が来たと思つたら、翌日には十度以上も気温が上がリ、春の陽気となる。どうなっているのだろうか。今年は厳寒だと言われながら、庭の梅の花は今にも開き始めようとしている。例年だと三月にならないと開かないのであるが…。

何んとも落ち着かない気候ではあるけれど、日本人社会も落ち着かない不安定が伝染し、将来何処へ向かつて進むのかの展望も夢も見失ってしまっている様である。

どうすりゃいいのさ思案橋、とは今の、現在の社会を詠っているのだろうか。

《ヨイシヨ広場》（陸平をヨイシヨする会）

八十路の惑い

田島早苗

機嫌良く明けた飛躍の午年、普段無信心な私も、娘や息子の家族に引かれて、土浦の八坂神社へ初詣に出かけた。穏やかな天候の故か境内へ続く道は参拝を待つ人の行列が長々と続いていた。

「待ち時間は二時間弱かな」

という息子の声に躊躇しながらも、長い列の尻尾に並び、秩序正しい日本人の仲間入り…。

しかし転んでも只では起きない私、肅々と行列に並ぶ人達を眺めながら様々な人生を勝手に想像するという楽しみを見付けていた。

受験生らしい息子二人を連れた上品な夫婦。パバの買ってきたクレープを分け合って食べる姿に微笑みが湧いてくる。「頑張ってるね」と心でエール

を送っていた。

車椅子の老母を連れた息子らしき大柄の人。普段は疎遠の母に精一杯の親孝行をしているのかな？等と想像を巡らせ胸が熱くなる。

恋人らしき二人連れの前を構わぬいちやつき振りに現代っ子の生熊を垣間見て、時代は変わったと溜め息。

娘の見付けてきた社の入口の大きな切り株腰を下ろした老い二人。息子の読み通り二時間近く待つて漸く拝殿の前に辿り着いた。

私達の前で祈り始めた受験生親子。パバや息子のあつさりとした参拝に比べ愛を込めたお母さんの祈りの長かったこと。新しく踏み出す一歩がらりと変わる人生もある。若い人の未来が素晴らしいものであつて欲しいと婆も真面目に祈願を込めていた。

人の節目が大切なのは若い時ばかりではない。振り返れば私も節目を迎える度に惑いと悩みをくり返してばかりの人生だった。

五十五歳の時、定年まで二年を残して退職を決意。「これからはお勤めしていた時に出来なかったことが目一杯出来る」「子育て、家事、妻の役目等を疎かにしてまで頑張った仕事を辞めれば、さぞかし清々するだろう」と思い、希望に満ちた第三の人生が始まる筈だった。でも仕事を離れてみると、何か忘れ物をしたみたいに落ち着かず、他のことに目が向くまで三年余りの月日を要した。人の脳細胞は思うように操ることが出来ないらしい。六十歳になり本腰を入れて地域社会に関わり始めてみると、すべてに出遅れた自分が惨めで悩むことが多かった。「多くの人と出会いを大切に、今出来ることを見付けていこう」と考えるようにな

って漸く私の社会参加も本物になってきた。

六十五歳の時、永く続けていた俳句の所属誌に随筆を掲載して頂く機会を与えられ、八年と四ヶ月全百回の雑文「四季の霞ヶ浦」を一度も休むことなく書き終えることが出来た。悩みや苦しみも多かったが終わった時の達成感が全てを消し去ってくれた。

七十五歳から村の俳句会にも関わりを持ち始め、喜寿を迎える節目に「四季の霞ヶ浦」を一冊の本に纏めたいとの思いが強くなり、七十七歳の誕生日前に「霞ヶ浦のほとり」と改題した一冊を発行することが出来た。この本のお蔭で「ふるさと『風』」とご縁が生まれ、人の輪が膨らんだ喜びを味わっている。

八十歳の読み初めに選んだ百田尚樹著「海賊と呼ばれた男」上下二巻に老いの魂が揺すぶられ、八十路坂はのんびりと、と思ひ始めた怠惰の心を鞭打たれてしまった。

出光興産の創業者、出光佐三をモデルにしたこのドキュメント小説には、揺るぎない愛国心を持って、激動の明治・大正・昭和を石油一筋に生き抜いた男の見事な九十五年の生涯が描かれ、その素晴らしい生き様に感動して二度も読み返してしまつた。

この歳になつてもまだ知らない世界や事柄が一杯だと思えば、残り少ない歳月を無駄には出来ない。とは言つても忘れっぽくなった脳細胞をこの先鍛え直すことが可能とも思えず、悩みは尽きない。やはり凡人には凡人らしく、まず目の前のことを一つずつ片づけて行くだけ。もうすぐ節分がやって来るが、八十路の惑いはこれからも続きそう。

《一寸一言・もう一言》

(一寸一言)

短い名文

打田昇三

「平家物語」に挑戦して長い文章を書いているので少し言い難いのだが、読む立場からすれば文章は明快簡潔で短い方が良い。しかし文章を書くこととする者は「読まれることを考えて格好をつける」から、どうしても普段は使わないような言葉を拾ったり難しい言葉に変えたりしたがる。

読み手が直ぐに理解できる文章こそ理想的ではあるが現実には中々難しい。清少納言だか和泉式部だか紫式部だか忘れたけれども「あらず」の三文字で済ませた返書は、短くても当事者以外に通用しないから問題外である。簡潔で意味が分かる文章は戦国時代の三河武士・本多某が陣中から妻に宛てた手紙「一筆啓上、火の用心、おせん(娘・幼児)泣かすな、馬肥やせ」が知られている。

さらに短い文はローマの英雄シーザーが遠征先から愛人クレオパトラに「来た、見た、勝った」と書いて無事と戦勝を知らせた手紙とされる。

日本でも状況は逆ながら似たような簡潔な文として知られるのが、明治九年に熊本で起きた「神風連の乱(不平士族の反乱)」に際して、暴徒に官舎を襲われ殺害された鎮台司令官・種田政明少将の愛人が東京の実家に打った「ダンナハイケナイ、ワタシハテキズ!!旦那はいけない(死亡)、私は手傷(軽傷)」という電文である。

発信者は粹筋から身受けされて任地に同行していた「小萬」という女性らしいが、さすがに明治の陸軍少将が見込んだ女性らしい名文だと思う。

此の電文は俗謡などに歌われて知られたらしい。

騎馬戦型↓肩車型

菅原茂美

50年前には50人の現役世代が一人の高齢者を支えていたという。しかし今は4人で一人を支える「騎馬戦型」で、2050年には、現役世代一人が高齢者一人を支える「肩車型」の社会が到来するという。

そこで政府は増え続ける社会保障費に充てるため4月から消費税を値上げする。増え続ける年金・医療・介護などの財源は国債など借金に大きく依存し、財政悪化の主因をなしている。将来世代に負担のつけ回しは、これ以上放置できない。高度の福祉を受けたければ高い負担はやむを得ない。

そこで、しみじみと思うのは、高齢者は病院の梯子など、「治療」に主力を置くのではなく、国を挙げて「予防医学」に全力投球すべきである。高齢者医療の主体は生活習慣から派生した疾病が主体である。豊かになると暖衣飽食・運動不足。それらが積み重なって、高血圧や動脈硬化などを引き起こす。予防は高齢になってから慌てて方向転換しても遅い。国や企業は基本姿勢として、若齢期から予防に専心し、健康寿命を引き延ばす事に重点を置くべきである。

そして国の借金が増えた原因を、社会保障にばかり押し付けてはいけない。政府は、極言すれば不要不急の事業に巨大投資をし、1000兆円もの借金を作ってしまった。諫早湾の水門・全国各地の巨大ダム等。国は、省益を捨て、国民の幸福のみを念頭に、国家財政を投入すべきである。

(もう一言)

業平橋(なりひらばし)

打田昇三

古今集で知られた「六歌仙」の一人である在原業平の「名にしおはばいざ言問はむ都鳥我思ふ人は有や無しやと」に由来した駅名である業平橋もクリスマススの宣伝のような「東京スカイツリー」という安っぽい名前に変えられてしまった。塔は誰が見ても一目で分るのであるから昔のままの名前で良いとは思わなかったであろうか。

平城天皇の子・阿保親王と桓武天皇の娘・伊都内親王を父母に生まれた在原業平は、父親が「藤原薬子(ふじわらのくすこ)の変」に関わったこともあり官位は左近衛権中将従四位上までしか昇らなかったけれども歌人として脚光を浴びた。

「ちはやぶる神代も聞かず龍田川からくれないに水くくるとは」は百人一首で良く知られている。清和天皇時代の貞観三年(八六二)三十六歳の時に母親の喪に服して一年間公務を休職し東国を回った。隅田川の畔で、背が黒く腹が白い、人間とは逆な渡り鳥を見て正直に「いざ言問わむ」と質問したのであろう。其の俣に解釈すれば人を恋うる歌のようだが、凡そ千百数十年後に自分に困んだ名称が消えることを予想して、本当は「我思ふ駅は有や無しやと」と言いたかったのではなからうか?と、つまらない想像を試してみた。

新芽を踏みつぶすな

菅原茂美

久々にリケジョの快筆。心から拍手を送りたい。理研の小保方晴子さん(30)が、ES細胞、iPS細胞に次ぐ第3の万能細胞であるSTAP(刺激

惹起性多能性獲得)細胞の作製に成功した。しかもそれは世界の誰もが思い及ばぬ簡略な方法であった。マウスの既に分化した体細胞を、細管通過や、弱酸性の液体に浸すなどのストレスを与えると、短時間で細胞が初期化するという。初期化された細胞は受精卵と同じ事。どのような器官にでも分化し得る。

植物や下等動物とは違い、哺乳類の分化した体細胞が初期化する事は、通常あり得ない。もしこれが簡単に応用できれば、再生医療に直結する。しかも倫理上の問題や、がんに関わる恐れもない。

最初彼女は英国の世界最高権威の科学雑誌「ネイチャー」に論文を提出したところ、余りにも簡素な方法なので「生物学を愚弄」するものとして一蹴されたという。しかし、改めて、世界の権威者の名を連ねて再提出したところ、OKという事だ。

かつて、若手の古人類学者などがアフリカで太古の人類化石を発掘し報告すると、英国の権威ある学会は一斉に反論し、偽物扱いをして罵倒した。若手学者は日の目を見ず、生涯を閉じた人は多数。後にその発見が基で古人類学は進展した。権力者は自分の地位を脅かす新参者を力づくで踏みつぶす例は多数見られる。いずこの世界も権力闘争の醜さよ！ 新芽よ育て！

ソチ五輪の話題で大騒ぎしている所へ、万能細胞の話が持ち上がり、この編集をしている中に交響曲「FROSHIMA」のトーストライターが現われたりなど世の中大騒ぎ。しかしこの大騒ぎにホッとしている人がいる。

本当はもっともっと大声で騒がなければならぬ

ギター文化館

2014 CONCERT SERIES

- 2月16日 ジュディカエル・ペロワ ギターリサイタル
- 3月 2日 河野智美 ギターリサイタル
- 3月21日 ARCタンゴトリオ コンサート
- 3月23日 大島 直 ギターリサイタル
- 3月30日 鈴木大介 ギターリサイタル
- 4月 6日 小沼ようすけ&金澤英明 JAS LIVE
- 5月 5日 藤井敬吾&北口功&角圭司 名器コンサート
- 5月24日 マリオ鈴木 ギターリサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

<http://www.furusato-kaze.com/>

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2
Tel0299-24-2063
(白井啓治方)

事が山のようにあるのだが、気候の変動と同じように儘ならない。困った事だ。
来月号は3月8日発行の予定です。

ことば座「朗読教室」受講生募集中!!

朗読は演劇です。このことを忘れて、スラスラよどみなく標準語で読むものだと思いません。朗読は、物語を読み聞かせるのではなく、声に劇しく(はげしく)心を演じることです。

物語や詩を朗読に表現する時は、言葉に紡がれた作者の心の真実をうけて、表現者として劇しく(はげしく)そのドラマ(物語)を演じる必要があります。

自分達の住むふる里を表現し、ヨイショしていく手段として、朗読は最も身近にあって適したものと言えます。

演劇表現としての朗読の基礎を学び、朗読表現で「ふる里の歴史・文化」をつたえて行きたいとの思いのある方、連絡をお待ちしております。

- ・月二回程度の授業を考えております。(受講料月額 3,000 円)
- ・ことば座の脚本・演出家:白井啓治が丁寧に指導します。

連絡先 080-3125-1307(白井)

《ふる里》

アレンジ蕎麦・蕎麦天席料理のお店です。

(ギター文化館通り)

看板娘(犬)「うらら」ちゃんか

ぜひお立ち寄りください。

080-3125-1307